



イスラーム研究所

معهد دراسات الشريعة

イスラーム研究所 設立に際し



イスラーム研究所 所長 森 伸生

イスラーム研究所設立

海外事情研究所付属イスラーム研究センターは2007年4月1日に海外事情研究所から独立して「イスラーム研究所」として活動することとなりました。

前身のイスラーム研究センターは2002年12月に設立されて以来、これまでに定期的な講演会の開催、ニューズレターの発行、紀要の発行、さらに企業との産学協同事業などを行ってきました。対外的にはイスラーム諸国要人や講師の招聘、イスラーム諸国への訪問などによりイスラーム諸機関との親密な関係構築を目指してきました。このような活動を通して、イスラーム研究センターの存在が日本国内はもとより、イスラーム世界においても、広く知られるようになってきました。

研究所の目的と活動

イスラーム研究所は建学の精神に則り、これまで培ってきたイスラーム研究をより促進すると共に、イスラーム世界の諸相を総合的に考察し、その根底にあるシャリーア（イスラーム法）を調査研究し、イスラーム世界と日本との様々な交流促進並びに相互理解に寄与することを目的としています。その目的を達成するために、（1）イスラームの政治・経済・社会等の諸事情の研究・調査及び、シャリーア研究（シャリーア解説書及びシャリーア勧告の翻訳・解説・研究等）、（2）イスラーム及びシャリーアに関する刊行物の発行、（3）イスラーム及びシャリーアに関する研究会・講習会・セミナー・シンポジウム等の開催、（4）イスラーム及びシャリーアに関する受託研究及び調査、（5）その他研究所の目的達成のために必要な事業を行なっています。

本研究所はイスラーム諸国の大学でシャリーア学を修めた研究者を多く抱えており、シャリーアの諸分野における研究を行なっていますが、具体的な研究対象としてはイスラーム諸国のイスラーム法学者が日々、民衆からの要請に応える形で出すイスラーム法的回答（ファトワー）を取り上げてイスラーム世界の現状分析を進めています。また、基礎的研究としてイスラームの啓典クルアーンの解釈研究などを行っています。その研究成果の発表の場として、年間6回の公開「タフスィール（クルアーン解釈）研究会」を開催し、社会に広く還元しています。今後、この研究会をさらに発展させていきたいと考えています。さらに、講師を国外から招聘して行われる「イスラーム・セミナー」では、イスラーム世界の多方面な話題を紹介しています。そして、研究所研究員を中心に発表が行われる「イスラーム講演」では、イスラームの宗教、生活、文化などをテーマにしてイスラーム社会と人々について講演が行われています。また、季刊誌「ニューズレター」を継続して発行していますが、頁を倍増し研究所の様々な活動および研究内容についても逐一報告を行なっていきます。年間の研究成果報告として、従来どおり紀要「シャリーア研究」を発行していきますが、セミナー、研究会発表もすべてその中にまとめて研究所の記録として残していきます。

産学共同研究の促進

研究所の注目すべき活動として産学共同研究があります。それは、イスラーム諸国に進出している企業と共同でイスラーム法上の合法性（ハラール）に関する調査研究を行うことです。企業との共同研究におけるイスラーム研究所の目的は企業におけるイスラームの理解を深めることへの手助けです。たんに、イスラームについて話しをするだけでは企業関係者もイスラームに関心を向けることはありませんが、企業としての業務を通してイスラームに関心を向けさせることによって、企業人もイスラームへと理解を深める可能性が大きくなります。それにより、日本企業のイスラーム世界への進出への手助けをすることが可能になります。さらに、このような学術的研究と産学共同研究を通じて、イスラーム世界の理解の促進また日本との経済的交流、文化的交流の基礎の形成ができると考えています。

ハラールに関する研究のさらなる拡大として、現在注目を集めているイスラーム金融をあげることができます。それは、イスラーム法上合法的な金融制度の研究です。イスラームは利子を禁止していますが、銀行活動をどのようにイスラーム法的に解決していくかという研究です。例えば、イスラーム銀行は貸付金で利子を得る代わりに客と共同で事業に投資し、収益を分け合う方法などです。イスラーム銀行の標語に「利益も損もともに」と掲げられているように、あくまでも、投資としての業務が行われることとなります。イスラームは利子を禁止していますが、投資は合法としています。しかし、非合法的な事業には投資できません。例えば、酒、ポルノ、ギャンブルなどは非合法事業となり、金融活動にもイスラーム法学者の証明が必要となります。このように、この分野での共同研究の拡大が可能になります。

シャリーア理解の必要性

イスラーム世界の人びとの間には理念的世界としてイスラーム共同体が存在します。イスラーム共同体は国家、民族、人種などを超えて世界に広がる共同体であり、全世界に存在するすべての信徒が帰属する単一の共同体です。イスラーム共同体の特徴はシャリーアを社会全体の規範としていることです。シャリーアは信仰行為の規範、道徳規範などの宗教的な側面から、家族法、商法、刑法、国家形成法、国際法等々まで全てを包括した法体形です。イスラーム世界の人びとはシャリーアによる生活を求めており、イスラーム法学者は常に民衆からの質問にイスラーム法的見解を与えている状況があります。そこには、各地域における生きたシャリーアの知識が積み重ねられています。

ゆえに、イスラーム世界に進出する企業やイスラーム金融に着手しようとする企業はイスラーム世界との信頼の構築を行なうためにも、シャリーアの研究、理解が必要です。つまり、イスラームを根本から理解する必要があり、イスラーム教徒の生きる指針といえるシャリーアを理解する必要があります。その理解のうえでの交流、交際、事業によって信頼が構築されていくものと考えます。

イスラーム研究所は英語表記では、シャリーア・リサーチ・インスティテュートとしています。それは、先に述べましたようにイスラーム研究所の実態がシャリーア研究を主体としているからです。イスラーム法は一般認識の法ではなく、イスラーム教徒の行動すべてを律するイスラームの教えであるゆえに、法の枠を超えたものです。ゆえに、シャリーアと表現することが妥当と考えました。日本語で研究所名をシャリーア研究所とせず、イスラーム研究所としましたのは、いまだ日本にシャリーアという言葉が定着していないからです。日本にもシャリーアという言葉がイスラームという言葉同様に定着するのにも間近であろうと思っています。

ハディース入門 (7) – ハディースの伝達方法

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

はじめに

ハディースの伝達方法は多岐にわたって存在するため、以下それに関わる条件をいくつか挙げてみる。

ハディース伝達に関わる諸条件

1. 信頼できる伝承者の援助。視覚障害者でハディースを正確に暗記していない者は、その筆録の正確性を期すために信頼できる伝承者の助けを借りる必要がある。
2. 筆記されていても伝聞の事実が確認できないハディースは伝達してはならない。筆記されたハディースは、師がそのハディースを聞いたことがあったとしても、伝承経路が明示されていない場合は、そのハディースを伝達することはできない。
3. 暗記と筆記に差異が認められる場合には、双方を伝達する。暗記している内容と筆記されたものや他の者によって伝達されたものとの間に異同が認められる場合には、暗記に基づいて伝達されるが、「私の暗記によればこうで、筆記ではこうなっている。」または「私の暗記によればこうで、他の者はそれについて次のように言った。」という表現を用いて双方を伝達しなければならない。
4. 筆者によって言及されていないハディースは伝達できない。伝聞したとみられるハディースが筆記の中に見つかったとしても、それを伝達しているという事実が確認できない限り、そのハディースは伝達することはできない。
5. ハディースの意味の伝達に際しては諸条件を満たす必要がある。ハディースには伝聞したものを一字一句の違いもなく伝達する方法と、意味が変わらない程度に表現を変えて伝達する方法がある。後者をハディースの意味の伝達といい、伝達者はそのハディースについて一字一句の意味を正確に理解していることや、アラビア語の同義語・類義語・反意語等、語彙論に熟練していることが求められる。
6. 意味の伝達には別表現も併記する。上記5に関連して「また某は言った。」または「某もそのように伝えた。」というように同じハディースの別表現を併記する必要がある。
7. ハディースの省略・要約は必要最小限に止める。伝聞したハディースの一部を省略または要約しての伝達については否認するものと、意味が取り違えられない程度の省略や要約は認められるとするものがある。
8. 文法ミス等が認められるものは伝達しない。口伝に際してはアラビア語の発音や文体、筆伝に際しては綴りや語法・文法の誤用が認められるハディースを伝達することは禁じられている。
9. 伝達に際してのミスは訂正する。伝達に際して発音や文体についての過ちが生じた場合には、その場で訂正して伝達を完成させることが求められる。
10. 伝達に際して最小限の改変を加えることができる。ハディース本来の意味に変更が生じない範囲内で、信頼できる伝達者が必要と認める改変を加えることができる。
11. 意味が同じハディースは一括して伝達できる。複数の者から伝聞したハディースの意味するところが同じなら、ハディース本文一つだけを選んで、それにそれぞれの伝承経路を併記することが認められる。
12. 伝承者名の変更は区別を目的とする場合のみ認められる。師から伝聞した伝承者名の変更は、区別のために出身部族名を付す等の範囲に限り認められる。
13. 口伝に際しては「某が言った。」という表現を付す。口伝による伝達は、「某が我々に語った。」というところは「某が我々に語った、と某が私に言った。」という表現に変えなければならない。
14. 複数のハディースを一つの伝承経路の許に一括して伝達することができる。伝承経路が同じであることが明確な複数のハディースは一つの伝承経路を付すだけで一括して伝達することができる。
15. ハディース本文を伝承経路に先んじて伝達することもできる。通

常は完全な伝承経路を呈示した後にハディース本文に言及するが、その反対も認められる。また伝承経路を途中で二つに区切り、その間にハディース本文を示すこともある。

16. ある伝承経路で伝達したハディースに他の経路を追加することもある。この場合、最初に示された伝承経路で伝えられたハディースの本来の意味と一致するハディースであることという条件で、他の経路によるハディースを併記することが認められる。
17. 部分的にしか伝えられていないハディースは伝達できない。師があるハディースの一部分しか口伝しなかった場合には、そのハディースの他の者への伝達は認められない。
18. 「預言者」を「アッラーの御使い」に変えることはできる。「預言者」と「アッラーの御使い」が等しくハディースの遡源であるムハンマドを指す尊称である場合には、「預言者」と伝聞して「アッラーの御使い」と伝達する（またはその反対）ことができる。
19. 伝聞に際して疑義ある場合はその旨を明示する。伝聞したハディースについて何らかの疑義が持たれる場合には、伝聞した際の状況説明を添えて伝達しなければならない。
20. 信憑性に差異あるハディースは、そのいずれをも伝達する。信頼できる伝承者が伝えたハディースと同一内容のハディースが信頼性に疑義が持たれる伝承者によっても伝えられている場合には、双方を伝達することが好ましいとされる。これは信頼性が劣る伝承者によって伝えられたものでも、信頼できる者が言及していなかった内容に触れている可能性があるため、と説明されている。
21. 複数の師から伝聞した場合には明示する必要がある。複数の師からある内容のハディースを伝聞した場合には、その旨を明示した上で一括して伝達することができる。

師からの伝聞

最も基本的なハディースの伝達方法で、ハディースを伝達する者を「師」(シャイフ)、ハディースを伝聞する者を「弟子」(ティルミーズ)と呼ぶ。弟子が師からハディースを伝聞する主たる方法には、次のようなものがある。

1. 師が口頭でハディースを暗唱し、弟子がそれを暗記する。
2. 師が筆録されたハディースを読み上げ、弟子がそれを暗記する。
3. 弟子が師から聞いたハディースを筆録する。

預言者ムハンマドの没後しばらくの間は、伝達の事実を伝える表現も多様で、どの表現がどの伝達方法に特有であるべきかなどは問題にされていなかったが、ハディースの伝達に際しての間違いや改変が問題視されるようになり、伝達方法についても厳格に調査されるようになった。その結果、「私は聞いた」または「某が私に語った」は師からの伝聞を、「某が私に伝言した」は師への口上を、「某が私に伝達した」は「認可」(イジャーザ)を示す表現というように使い分けられるようになった。以上はいずれも師が主宰する勉強会等、事前に計画・準備された場におけるハディースの伝達についての表現である。一方で「某が私に言った」または「某が私に述べた」は勉強会終了後の質疑応答や、弟子が師の自宅を訪問した際の個別的・非計画的な伝達について用いられる表現とみなされるようになった。

師への口上

弟子から師への口上は「呈示」(アルド)と呼ばれる。これはある者が伝え聞いたハディースを自分の師に口上して聞いてもらうこと、またはそれに類似した状況を指している。この場合に師がそのハディースの信憑性を確認すれば、その者はそのハディースを自分の師から伝え聞いたものとして、他の者に伝達することができる。師への口上には、次のようなものがある。

1. ある者が自ら自分の師に、ハディースを暗唱にて口上する。
2. ある者が自ら自分の師に、筆録されたハディースを読み聞かせる。
3. ある者が自分の師に対してハディースを口上する場に同席して、その口上を聞く。

師への口上を示す表現として、「私は某に次のように口上した」、「私は某に次のように口上されたのを聞いていて、それを容認した」、「某

は我々に、口上されたことを次のように伝言した、「某は我々に伝言した」が用いられる。

認可（イジャーザ）

口頭または筆記によってハディースの伝達を許可することを「認可（イジャーザ）」という。アルイラーキーは以下の9つをイジャーザとみなしている。

1. **特定の者に対する特定なものの認可**：師がその弟子のうちの一一人に対してあるハディースを示し「私はあなたに対して、このハディースの伝達を認可する。」または「私はあなたに対して、アルブハーリーの『サヒーフ集』の伝達を認可する。」と宣言するように、認可を与える者、認可を得る者そして認可の対象であるハディースのそれぞれが特定できる形で伝達された場合をいう。認可（イジャーザ）の種類の中では最も信憑性が高いものとみなされているが、容認しない者も多い。
2. **特定の者に対する不特定のものの認可**：師がその弟子のうちの一一人に対して「私はあなたに対して、私が伝聞したすべてのハディースの伝達を認可する。」と宣言するように、認可を与える者、認可を得る者は特定されているが認可の対象がどのハディースであるか特定できない形の認可を指す。
3. **不特定の者に対する不特定のものの認可**：師が自分と同世代の者や同郷の者、同族の者というように特定のグループに属する不特定の者に対し不特定のハディースの伝達を認可するもので、「私は私と同世代の者に対して、私が伝聞したすべてのハディースの伝達を認可する。」とか「私はムスリムに対して、ハディースの伝達を認可する。」「私は個々のムスリムに対して、ハディースの伝達を認可する。」「私は現時点において斯々云々の場所においてハディースを学んでいる者たちに対して、ハディースの伝達を認可する。」と宣言するような場合を指す。
4. **不特定の者に対する不特定のものの認可**：師がある者に対して「私はあなたに対して、『スナン集』の伝達を認可する。」または師

が「私はムハンマドという名を持つ者に対してハディースの伝達を認可する。」と言うように、誰に対する認可なのか、そしてどの『スナン集』についての認可なのか特定できないような形のもの指す。こうした場合には、どのムハンマドに誰が編纂した『スナン集』の伝達を認可するのかが確認されない限り受け入れることはできない。

5. **望む者に対して認定者またはそれ以外の者が特別に与える認可**：師が「私は認可を望む者に対して、認可を与える。」または「私は某が望む者に対して、認可を与える。」と表現する場合をいう。ハディース伝達の認可を望む者に対して与える認可は、その対象となるハディースの数や内容、また認可希望者がどのような人達で何人いるのかが確認されない限り容認されない。
6. **不在者に対する認可**：例えば「私は某とその子供たちに対して、ハディースの伝達を認可する。」または「私は子供に対して、ハディースの伝達を認可する。」というように、師が同席している弟子に対して直接与える認可ではなく、その場に居合わせていない特定の者に対して、またはその場に居合わせていない特定の者の子供たちなどの身内に対して与える認可を指す。
7. **不適切な者に対する認可**：ハディースの伝達に相応しくないとみなされる者として、年少者、ムスリムでない者、品行方正と認められない者、異端的思想の持ち主、正常な知性や理性を持たない者などが挙げられる。ハディースを正しく理解し正確に暗記できる最小年齢については、金曜日の合同礼拝における説教の内容が理解でき、教義問答に際して論拠を引用して他人の見解に反論できる等が目安となっている。
8. **認可されたものについての認可**：師が以前に認可を受けたものについて、そのまま弟子に認可する場合には、「私に対して認可されたものを、私はあなたに対して認可する。」というような表現が用いられる。こうした認可は、多くのハディース学者によって支持されている。

アルコールを含んだコロンまたは香水の使用に関して

—イブン・ウサイミン師のイスラーム法的回答から—

イスラーム研究所 所長 森 伸生

アルコールはイスラーム法学者の全般的な考えでは、不浄と考えられているが、ここに、それに対抗した意見がサウジアラビアの法学者イブン・ウサイミン師（1292年～2001年）から出ているので、紹介する。

質問：アルコール分を含んでいるコロンを使用していますが、コロンはナジス（不浄）ですか。

イブン・ウサイミン師の回答：コロンは不浄ではない。同様に、他のアルコールでも不浄ではない。なぜなら、「アルコールが不浄である」との意見は「ハムル（ワイン）が不浄である」との意見に立脚しているからである。しかし、ハムルは感覚的な不浄ではなく、その不浄とは抽象的な不浄である。その根拠は以下の通りである。

第一根拠：教友たちはハムルが禁じられたときに、市場にハムルを流してしまっ。もし、ハムルが不浄であったならば、市場にハムルを流すことは許されない。なぜなら、ムスリムの市場に不浄な物を流すことは誰にも許されないからである。

第二根拠：ロバがハイバルの戦いの日に禁じられたときに、預言者はそれが入っていた容器を洗うことを命じたが、ハムルが禁じられたときには預言者は容器を洗うことを命じなかった。

第三根拠：一人の男が預言者にハムルの入った皮袋を贈った。預言者は彼に「それは禁じられた」と言った。そこで、ある男が皮袋の持ち主に、「それを売ってしまえ」と囁いた。預言者はその男に、「何を囁いた」と尋ねた。彼は、「私はそれを売ってしまえと申しました」と答えた。預言者は、「アッラーが何かを禁じたときには、その値段も禁じら

れる」と言った。その男は、皮袋の口を開けて、ハムルを流した。しかし、預言者は皮袋を洗うことを命じなかった。ハムルが不浄であったならば、預言者はそれを洗うことを命じたはずである。なぜなら、その容器を他の飲料や洗淨のために使用するからである。これはハムルが不浄でないことを示している。

クルアーンに、ハムルに関する一節「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。悪魔の望むところは、ハムルと賭矢によってあなたがたの間に、敵意と憎悪を起させ、あなたがたがアッラーを念じ礼拝を捧げるのを妨げようとすることである。それでもあなたがたは慎まぬのか。」（クルアーン5章90節、91節）がある。

ここで言われている不浄とは、行為的な不浄である。つまり、それは観念的な不浄である。それゆえに、悪魔の行為からでた不浄と表現しているのである。それから、節の中であげてある「賭け事」などは、これは感覚的な不浄ではない。この不浄性の意味は観念的な不浄性であり、感覚的な不浄性ではない。

アルコール分を含んだコロンの使用についてであるが、アルコール分が少量含んでいるだけであるならば、その使用は問題ない。しかし、多量に含んでおり、もし口に含んだならば酔う可能性があるならば避けることが望ましい。一方、アルコールを多量に含んでいる物であっても、傷の治療のために必要とあればその使用は問題ない。

参照(http://www.ibnothaimeen.com/all/noor/article_1120.shtml)

アズハル大学卒業生第二回国際フォーラム

イスラーム研究所 客員教授 武藤 英 臣

はじめに

西暦972年に創設されたエジプト・カイロにあるアズハル・モスクを起源とするアズハル大学はイスラーム世界で最古の大学の一つだ。この卒業生による国際フォーラムが昨年に続き今年も開催された。日本からアズハル大学卒業生三名を含め四名が参加した。

出席招請状には『人々の集まるモスクとして、またイスラーム学の最高学府としてのアズハルの役割を引続き果たすため、特に、イスラーム共同体が直面し、世界にイスラームの正しい姿を示す努力が求められているこの新時代、世界各地のアズハル卒業生を集め、アズハル卒業生第二回国際フォーラムを開催することを大学は決意した。フォーラムはイスラーム暦1428年3月13日～15日（西暦2007年4月1日～3日）、ムバラク・エジプト大統領閣下スポンサーシップのもと「イスラーム共同体が直面する現代の挑戦」を主題として・・・』と記されていた。

カイロ市郊外のJWマリオット・ホテルを会場とし、参加者は国外招待者80名ほど（一部報道では120名）、国内から200名ほどが集まった。開会式後、直ちにセッションに移り、合計7セッションが行なわれた。以下はその概要報告である。

第一日目：開会式

4月1日9時30分、式はクルアーン朗読で始まった。次に、アッタイエブ・アズハル大学長が今回のフォーラムについて、次いで、私が卒業生総代として、世界中にいるアズハリヤー（アズハル卒業生）とそのネットワーク、特に日本人アズハリヤーの活躍について、次いで、エジプト政府代表として、ザカズーク宗教大臣が現代世界とムスリムの務めについて、最後に、アズハル総長タンターウィ師がアズハル教育についてそれぞれの挨拶で触れて終了した。

実は、直前まで、卒業生総代として誰が挨拶するか話題になっていた。開会式のプログラムを開き、雑壇に並んだ顔を見て、会場に参集した人々は驚いたようだ。

セッション：第1セッションは開会式後休憩を挟んで11時半から始まった。テーマは「イスラーム文明の独自性」、セッション議長はエジプトのムスタファー・アル＝フィクヒー氏であった。登壇演者は、ヨルダンのアフマド・ハリール師、サウディアラビアのアブドゥラー・アッ＝シャリーフ師、チュニジアのアブドルマジード・アン＝ナジャール氏、パレスチナのアクラマ・サブリー師がそれぞれプレゼンテーションを行なった。その後、会場からのコメントと質疑応答が行なわれ、全てのセッションがこのように進められた。

第2セッションは午後4時から行われ、テーマは「倫理面における挑戦」、議長はヨルダンのアブドゥッサラーム・アル＝アッパードイ氏、演者は、在カイロ・マレーシア臨時代理大使ファクルディーン・アブドルムウター氏、スイスのファウズィヤ・アル＝アシュマーウィ女史、イラクのスニー派理論家として知られるハリス・アッ＝ダーリイ氏、オーストラリアのイブラヒム・アブームハンマド氏であった。

第3セッションは日没礼拝後、テーマは「立法面における挑戦」、議長はエジプトのスフィー・アブターリブ氏、演者はサウディアラビアの元石油相アフマド・ザキ・ヤマーニ氏、カタールのシェイハ・ハマド・アル＝アディーヤ女史、同じくカタールのアリー・ムヒッディー

ン・アル＝クワットダーギー氏がそれぞれプレゼンを行った。セッションは9時半に終了した。カイロ市内の自宅へ戻るため車に乗り込むヤマーニ・元石油相と私は遭遇した。『今日の開会式の挨拶は良かったね、タイエブ！』とヤマーニ氏は私に声を掛けてくれた。実は、開会式で私が挨拶しているとき、目の前の貴賓席のヤマーニ氏と目が合い、ニコリと微笑んでくれたのであった。

第二日目：第4セッションは9時からで、テーマは「科学面からの挑戦」、議長はモロッコのアブドルマジード・アッ＝スガイル氏。演者は、ボスニアのムフティであるムスタファー・チェリチ師、UAEのアブーラッパバ・フセイン氏、パレスチナのシャフィーク・ムサー・アイヤーシュ氏等がプレゼンを行った。

第5セッション、テーマは「現代の挑戦と歴史」、議長はインドネシアのファイザ・アリー・シブラムリース女史、演者は、エジプトのアブドルモウター・バイユミー氏、サウディアラビアの盲目の哲人ムハンマド・アフマド・サーリフ師、カタール（オリジナルはスリランカ）のディーン・ムハンマド氏がプレゼンした。

預言者生誕記念祝賀式：昼食後、選ばれた国外参加者30名（日本人は徳増氏と私が参加）は、預言者生誕記念祝賀式典会場へ向かった。カイロ・ナセル市にある国立国際会議場の中の特別講堂で式典

は行なわれた。会場へ入るまでに幾重もの警護網を通らなければならなかった。講堂の中は、殆どがアズハルの制服制帽姿で、あたかも、アズハル卒業式を思わせるものがあつた。この式典は、宗教省が主催し、過去一年間イスラーム活動で顕著な功績のあつた者を顕彰するものであつた。式は宗教大臣、アズハル総長の順に挨拶が行なわれ、最後にムバラク大統領が20分程度スピーチし、次いで少年の部、青年の部、壮年の部、それぞれ三名ずつの名前が呼ばれ登壇し、大統領から直接、賞状と賞金を授与されるというものであつた。



開会式雑壇

右側から、アッ＝タイエブ学長、タンターウィ総長、ザカズーク宗教大臣、筆者

第三日目：第6セッション、テーマは「現代と未来への挑戦」、議長はコンボのナイーム・タルナーファ氏、演者は、パキスタンのマハムド・ガージー氏、エジプトのムハンマド・アンマラー氏、オマーンのムスリム・サーリム・アル＝ウヘイビー師、モロッコのアブドルマジード・アッ＝スガイル氏等のプレゼンがあつた。第7セッション、テーマは「西側とイスラーム文明」、議長はスーダンのムハンマド・スィッル・アル＝ハタミ氏、演者、フランスのマハムド・アズブ氏、同じくフランスのアブドルウドード・グル氏がプレゼンした。

閉会式とアズハル総長昼食会：閉会式では先ず、アッ＝タイエブ学長から短い謝辞、在カイロ・マレーシア臨時代理大使からマレーシア政府が次回のアズハル卒業生国際フォーラムのスポンサーになることの表明。次いで、本フォーラムのスピーカの一人と予定されていた在カイロマレーシア大使のメッセージが読上げられた。それは、アズハル・フォーラムを高く評価し、マレーシア政府が次回のアズハル・フォーラムをクアラルンプールで開催すると確約し、今回参集した人々全員がクアラルンプールで再会出来る事を希望する、と述べていた。その後、大型バス数台に分乗し、ナイル河に浮かぶ遊覧船レストランへ向かい、船上昼食会となった。昼食後、デッキ下船口にアズハル総長と学長が並び、船を降りる一人ずつと握手し、声を掛け、記念写真を撮ったりして、今回のフォーラム全スケジュールが終了した。

留学記

ヨルダン国立バルカ実科大学イスラーム神学部

室 達 康 宏

今回貴重な紙面を頂いたのでこの機会を利用して簡単ではあるが私が通うヨルダンの国立バルカ実科大学の様子・現状を紹介したいと思う。

大学及び学部について

ヨルダン・ハシミテ王国の首都アンマンから西方へ車で45分程の町サルトにバルカ実科大学の本校は位置している。このバルカ実科大学は全国に散在する単科大学・短期大学を統合する形で1996年に創設されたので、大学としての歴史は浅い。実科大学 (Applied University) の名に表れているように、応用化学・情報学・工学・農学等の理系学部で有名であり、学生総数は約2万1000人で、ヨルダン全人口が約535万人であることを考えれば、非常に大きな高等教育機関である。私の通うイスラーム神学部は元々は単科大学として1990年にアンマン市内に設立されたものだが、97年にバルカ実科大学に統合されることとなった経緯がある。その理由は同学部のカリキュラムが机上の論理を実生活へ適用させることを目指して作られており、この点で学問の成果を社会に還元しようと試みるバルカ実科大学の理念に合致していたからである。2002年からは市中心部から車で15分ほどにある郊外のターレック地域の静かな丘の上に学部校舎を移転している。

学生数について

イスラーム神学部の学生数は約1700名である。一般的に外国人留学生の数が多いのがイスラーム学関連の学部の特色の一つであるが、私の学部も例外ではない。その数は400~500人で全体の3~4割を占めている。その外国人留学生の中でも特に多数派を形成しているのがイラク人留学生である。ヨルダンとイラクとの歴史的友好関係により元来イラク人留学生数は多かったようであるが、現在の内乱状態のイラクでは学業成就是相当厳しいので、ここ数年で学生数も一気に膨れ上がり、約300名のイラク人が我々と肩を並べて学んでいる。聞くところによると、イラクの大学で3年生や4年生になっていながらも、泣く泣くそこでの勉学を断念し、アンマンでまた一からのスタートを余儀なくされている者も少なくないようである。その他の留学生は全世界のイスラーム地域からの学生なのでバラエティーに富んでいるが、地理的に中東に近いアフリカ諸国からの学生が多く、次いで東南アジアや旧ソ連圏イスラーム地域からの学生が多い。ちなみに日本からの留学生は私1人である。

学科、科目及び講義について

イスラーム神学部には以下の学科が設置されている。イスラーム法学と法源 (フィクフ ウスールフ) 科、宣教とイスラーム神学 (ダアワ ウスールディーーン) 科、クルアーン読誦 (キラーアトルクルアーニヤ) 科、アラビア語科。科目の単位は週3時間の講義 (通常90分講義を週2回) を1学期間中受け、三度の試験の結果が合格点に達すれば単位取得となる。この週3時間の科目を3単位とすると、卒業には

130単位必要となる。各科目の合格点は50点以上だが卒業するには全科目の平均点が60点以上でなければならず、全ての単位が取得出来ていても平均点が基準に達していなければ、いずれかの科目を再履修し、よりよい成績を取り、平均点を上げねば卒業出来ないことになっている。参考までに私の所属する宣教とイスラーム神学科の主な履修科目は以下の通り。タフシール (クルアーン注釈)、クルアーン読誦と暗記、ハディース (伝承)、アキーダ (信仰簡条)、宣教論及び手法、シーラ (預言者伝)、比較宗教学、諸宗派の相違、私的関係法 (アフワールルシャフシーヤ)、社会関係に関する法 (ムアーマラート)、宗教儀礼に関する法 (イバーダート)、クルアーンの奇跡、信仰と科学、クルアーンの物語、イスラーム教育と手法、イスラーム法入門、イスラーム法理論 (ウスールルフィクル)、イスラーム学者の研究手法、イスラーム文化、アラビア語文法、現在のイスラーム社会、ヨルダン社会、愛国教育、等。

特徴

これはヨルダンのイスラーム関係の学部すべてに当てはまる特徴である

が、ここでは特定の学派や思想、党に偏った教育はなされておらず、イスラーム本来の中道の精神を実践していると自負している。とかくその国の方針によってイスラーム学の方向性も決められがちだが、ここではその心配はないようである。ただその反面、特定学派に偏らない中道とは聞こえはいいが、私の印象としては学部の方針としてどういう学生が育て欲しいかのビジョンが薄ようにも思える。各教授がそれぞれ好きな講義をするのを見るとそう感じることもあるのだが、どちらがいいのかは分からない。もう一つの特徴としては男女共学があげられる。



イスラーム神学部前々筆者

男女共学は日本では当たり前だが、一般的にイスラーム関係の大学では男女交際を避けるために男女別の校舎や教室が普通であるが、私の学部やその他のヨルダンのイスラーム関係学部でも共学である。これは国の教育方針で、国が設置を認めた大学は全て男女共学との規則に基づくものである。しかしこれにはイスラーム教育であっても、政教分離の枠内で導入された西欧式学制のもとに限って認められることを端的に表しているように感じられる。

入学経緯

最後に私がこの大学で学ぶこととなった経緯を紹介する。私は拓殖大学卒業後、しばらく当地で働いていたところ、昨年思いがけず王族の1人に謁見する機会があり、その際に「もしヨルダンで勉強したいなら言ってくれ」とのお言葉を頂いたからである。ヨルダンのような王国では王族の紹介は何よりも強い援助になるので、かねてよりヨルダンでのアラビア語とイスラームの勉強を希望していた私には渡りに船だった。その後はとんとん拍子で話が進み、当大学の神学部生として入学が許可され今日に至っている。これからは自分の力で勉学に励まなければならないのは勿論だが、推薦してくれた王族のためにも恥ずかしくない成果を見せていかなければならないと気を引き締めている。

第19回イスラーム最高会議評議会会議に出席して

イスラーム研究所 客員教授 徳増 公明

3月27日から30日までエジプトのカイロで開催された第19回イスラーム最高会議評議会会議（エジプト政府ワカフ省イスラーム最高会議評議会主催）にイスラーム研究所客員教授・武藤英臣氏と共に招待され、出席しました。この会議は毎年開催されていて今年は海外88カ国190人、国内から200名の関係者が参加しました。

会議のテーマは「グローバル化状況下におけるイスラーム世界の問題とその対応」で9セッションが4日間に渡って行なわれました。

昨年は同じテーマでグローバル化の「政治と経済における影響」で、今年は「文化と社会における影響」が取り上げられました。

27日朝の開会式ではクルアーン読誦に続いて、主催者を代表してムハンマド ザカズーク・ワカフ大臣、参加者代表のアブドゥラー アル・サーリミー・オマーン・ワカフ宗教担当大臣、シャヌーダ アル・サーリス・アレキサンドリア教皇、ムハンマド タンターウイ・アズハル総長、ムハンマド ハテミ・前イラン大統領、ムバーラク・エジプト大統領（アハマド ナゼフ首相代読）のスピーチがありました。

各セッションは2時間～2時間半で、7～8人のパネリストが10分から15分スピーチし、残った時間で出席者との質疑応答をしました。言葉は一部の欧米の学者を除いてアラビア語。小生も出発前に原稿を会議の事務局へ提出したところ、パネリストとして話す機会を与えられました。その内容は、「日本においては、経済面ではグローバル化の恩恵を受け、経済成長を遂げることができたが、社会面においては良くない面もあった。中でも家庭、家族への悪影響として、核社会、家庭崩壊・家庭内暴力、失業・ニート問題、少子化問題、生命軽視・自殺問題等がある。これらを是正するには日本古来の伝統文化を再認識し尊重すると共に、イスラームの社会規範を学び取り入れることが肝要である。」というものでした。



イスラーム諸国からの参加者たち：左から3人目はハティミ元イラン大統領

全体のセッションの中では次のようなものが熱心に議論されました。

1. 文化面における影響：（1）イスラームとその他の部門：①イスラームと他宗教との対話②イスラーム文明と他文明の対話（共生と衝突）③文化の独自性(a)イスラームの価値(b)理性と理性論(c)文化・社会における人間の権利(d)新しいものと近代的なもの(e)宗教と文明の多様化（2）イスラーム世界の文化の独自性を脅かすグローバル化の危険性の部門①教育（言語、宗教、歴史）②マスメディア③映画や演劇④情報技術の革命⑤理性の低下
2. 社会面における影響：（1）社会的結束部門①ウンマ（イスラーム共同体）社会的結束②宗教、民族主義の復興③品行のタイプ④N G O（非政府団体）（2）家族問題部門①女性問題②家族間の権利と義務③男女関係の新しい形④社会および健康への影響（独身主義、エイズ、うつ病、自殺、失業等）⑤家族、女性、子供に関する国際的文書、

閉会式ではこの会議全体の結果が報告され、参加者から承認された後、次の声明文が主催者から発表されました。以下はその要約です。

カイロ声明

今日のイスラーム世界に広まっている様々な状況について、どの専門家もそれは毎日に複雑にかつ世界的なものになっていくと指摘しています。イスラーム世界もこのグローバル化の中から抜け出すこと

はできず、それと関わらざるを得ません。ムスリムはこの世界で自分たちだけで生きているわけではありません。今日、ムスリムたちは分離できない世界の一部分に住み、急激な発達した通信技術の影響を受け国境や境界線を無視して侵入してくる様々な情報や通信に晒されています。

疑いもなく、グローバル化は他の新現象と同様に肯定的側面（良い面）と否定的側面（悪い面）を持っています。その上、政治的、経済的、文化的レベルでもその2面性を持っています。従って、ムスリムはこれらの様々な面において独自の立場を見つけていかなければなりません。世界同時に機会と利益をもたらしてくれる側面からは、最大限の利益を得よう、求められています。しかし、ウンマのもつ独自性、特有性、宗教・文化的価値を維持するためには、その否定的な面から守らなければなりません。ムスリム世界はこれらの目的を実現するため、次のことが考慮されるべきです。

1－イスラームの初期から全盛期以来、イスラーム文明はすべての文明や文化に開放されてきました。偉大な哲学者アベロエスは「他の貢献した者から知識を得ることは、避けて通れない義務である。我々はそれを評価し、その肯定的面から利益を得て、否定的面を避けるべきである」と述べています。

2－我々のアイデンティティを堅持し、崩壊の危機から守るために、教育カリキュラムとメディアによる、イスラーム社会の社会的、道徳的

価値を保持することが重要。

3－我々は自分達のアイデンティティ、特性、主義の間の均衡を目指すため、また同時にすべての文明、文化、宗教を開放するため、自分達の文化、考え方、宗教観を継続的に更新、発展する必要があります。

4－文明と宗教の衝突理論に直面するなかで、尊敬、平等、相互利益を基盤とし、強固にして建設的な方法でイスラーム世界（ウンマ）と世界との対話を促進させる。

今日、イスラーム世界はこれらの障害を克服するため、

最善の解決法を追求しなければなりません。しかし、これはムスリムがスラム街や社会から孤立して住むことを意味するものではありません。イスラーム世界は世界の平和と安定の柱を堅固なものにするため、また人類の福利のため、あらゆる国家、国民、宗教、文明といつでも協力する用意があります。

今回の会議で取り組んだ主な問題点は文化、社会面に焦点を合わせたものでした。ウンマを復活と発展に導くのは、イスラーム学者と有識者に課せられたことです。さらに、彼らには若者たちに希望を与えること、若者たちから絶望と挫折の要因を除去することが要求されます。そうすれば、ウンマは安全、平和、安定を保持しながらムスリム世界の輝く未来の建設に向け、人類の利益のため、世界平和を建設するため世界の国々と一緒になって可能性を秘めて前へ進み続けることができるのです。アッラーがあなた方に成功を授けて下さいますように。

あとがき

今回の会議に参加することにより、イスラーム諸国の指導者たちと会い意見交換をする良い機会を得たことは大きな収穫でした。インターネットなどの通信手段が発達した今日、実際に会って話し合うことは、親交を深め信頼関係を築く上で極めて大切なことだと実感させられました。

初めてのイスラーム会議に参加して

イスラーム研究所 客員教授 飯森嘉助

はじめに

今年に入り森イスラーム研究所所長から突然電話を頂き、今年度からこれまでの研究センターから独立して「研究所」になるので私にもその一員として参加してほしいと言う内容だった。私の専門がアラブの歴史でシャリーアやイスラーム神学ではないことに躊躇したが、これからはアラブ文化も含めた活動を行うとのことだったので、その方面での協力をすることで了承した。そこで何かの参考になるかと思い、これまで書いてきた原稿の整理を始めてみたところ1979年にカタールで開かれたイスラーム会議に招待された時の報告書が出てきたので当時のイスラーム会議の様子を報告することにした。

イスラーム暦15世紀記念シンポジウム

この会議はヒジュラ歴（イスラーム暦）も1400年代を迎え、一つの記念としてカタール大学が記念のシンポジウムを開くのに招待されたわけだが、最初なぜ私が招待されたのか不思議だった。しかしその理由で思い当たるふし一つだけあった。それは当時カタール大学の総長がエジプト人のイブラーヒーム・カーズィム博士で、博士とは私がまだイスラームに入信する以前、私の信州大学の英語の恩師である北村先生を介して長野でお会いしていたのである。それは北村先生とカーズィム博士はかつてアメリカのハーバード大学で共に学んだ親友同士で、先生が先に帰国する時に「日本の長野の北村を訪ねてくれ」と言ってきたから、いつかピラミッドとナセル大統領の国エジプトの友人に会えるだろうといつも学生に話されていて、その先生を介して博士と知り合うことができたからである。後に博士は世界教育心理学会会長になり、しばしば訪日を果たされるようになってからは、そのたびに私に連絡を下さり、北村先生によろしく伝えてほしいとの伝言を残していったものである。その後博士がカタール大学の総長に就任されたのをきっかけに、日本人留学生を受け入れるとの連絡があった。当時私は「日本ムスリム協会」の副会長をやっていて留学を担当していたので、日本人ムスリムの若者から現在イスラーム研究所の客員教授であり同志社大学教授である四戸潤弥氏と拓殖大学のアラビア研究会から佐野、橋本両君を留学させることが出来た。そしてその後まもなくこのシンポジウムへの招待を受けた訳である。

往復の航空券はファーストクラス

私の人生でファーストクラスの航空券で旅行したのはこの時が最初で最後だった。座席は広く快適な旅だったが、問題は隣の席の青年が日本を立ってからウイスキーをガブガブ飲み続けていることだった。老婆心から思わず飲みすぎると体に障ると注意してしまった。しかし、それがきっかけで話をするようになった。それで彼のガブ飲みの原因が分かった。彼はサウジアラビアにある日本企業の社員で休暇で一時帰国していたが、これから戻るところで、サウジに入ったら一切のアルコールは飲めなくなるので今飲み溜めしているとのことだった。

それから現地に着いても宿泊先のホテルは一流で、大学側の手厚い配慮に感激のしどろしどろだった。カタールは海老が豊富らしく海老のたくさん入ったカレーがことのほかおいしかったのを憶えている。

イスラーム暦15世紀記念シンポジウム

このシンポジウムの正式名称は「預言者伝と伝承学に関する第3回世界会議」というもので、1979年11月24日から29日にかけてイスラーム圏及び少数イスラーム地域73カ国を代表するイスラーム学者を

集めて首都のドーハで開催された。日本人は私とサウジアラビアのリヤド大学講師の木場氏の二人が参加した。初日の開会式では革命後のイランの動向に警戒しつつも最近のイスラームパワーを反映し意気盛んな反西欧色の強い基調演説があった。二日目からは4つの分科会に別れて討議に入った。それは1)預言者伝とイスラームの文化遺産、2)イスラーム教育問題、3)イスラーム法学問題、4)イスラーム布教問題である。私はこの中の(1)の分科会に入った。以下は其中で討議された内容の概略である。

- 西欧のオリエンタリストの預言者像は十字軍的な意図が多かれ少なかれ認められる。
- 歴史学者と伝承学者の方法論的対立が見られた。伝承学者は伝承テキストのイスナード（伝承経路）を重視し、歴史学者がそれを軽視する傾向にあることを非難する。対して歴史学者は事実の究明を重視し基本文献の原文批判を通して得られた結果を重視し、伝承学者の描く預言者像に対して全面的には賛成しかねると主張する。歴史学者は新たな預言者像を求めて従来無視されてきた預言者に関わる史跡を調査し歴史地図の作成に取り掛かった。伝承学者は研究にコンピューターを積極的に導入するための研究作業に取り掛かった。
- 預言者伝とスンナ（預言者の言行）の復活を推進するために首都ドーハにスィーラ（預言者伝）研究所を設置することが決められた。
- イスラームの文化遺産を自分達の手で掘り起こそうという気運に関連して、フランクフルト大学教授フワース・スキーン博士が「ルネサンスに与えたイスラーム諸学」と題する講演をアラビア語で行って万雷の拍手を浴びた。博士はイスタンブール生まれのトルコ人でイスラームの自然科学史を専門とし、最近その研究の一部を発表して脚光を浴びている学者である。
- 全体の印象として世界中の学者が一堂に会して開かれた会議は、自由な討論が行われ、時には激しい口論も見られたが、ともかくまとめ上げられ数々の成果を生んだ。ムスリム学者の懐の深さを示すものである。また本会議は最初から最後まで正則アラビア語で討議されたが、全体会議の議決の一つに正則アラビア語の普及と強化が上げられていたことと合わせて印象深かった。

あとがき

シンポジウムの合間に我々は皇太子殿下主催のレセプションに招待され、楽しい一時を王宮で過ごすことが出来た。当時の皇太子は威風堂々とした体躯で明らかに北アラブの出自を物語っていた。レセプションで出されたカルダモンの香りがする砂糖なしの本格的なアラビアコーヒーの美味であったことは一生涯忘れられない。それから豪華な食事が出されたが、給仕をしていたのが色白の東洋系美青年だったので思わず国籍を尋ねてしまった。意外にも彼らはフィリピン人で、恐らくスペインとの混血のキリスト教徒の出稼ぎであろうと推測した。

シンポジウムの中でハディース学研究にコンピューターを積極的に導入する提案をしたのは、「イスラームにおけるハラールとハラーム」の著者として有名なカラダーウィー博士であった。博士は大きな声で「イスラーム研究に文明の利器を使うことに恐怖心を抱くとは何たる臆病者か」と一喝して導入に慎重な者を沈黙させてしまった。

偶然発見したメモを読み返していると、当時のイラン革命が成功し不安と期待の混ざったイスラーム世界の状況が甦ってきた。あれから30年近く過ぎてイスラーム世界は劇的変化を遂げた部分と、いまだに変わらない部分が見られる。ただ言えるのは当時は年齢も若かった分イスラームの将来に期待する部分が大きかったように思う。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL <http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/>

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成19年7月13日発行
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所主任研究員
柏原 良英

コラム

イスラームの暦：ヒジュラ暦

ヒジュラは「遷移」を意味するアラビア語である。単に、住居場所を移るという意味だけではなく、今までの人間関係を断ち切り新しい人間関係に移っていくという意味がある。イスラーム史においてヒジュラといえば、622年の預言者と教友たちのマッカからマディーナへのヒジュラをさす。これは決して、単に迫害からの逃避ではなく、マッカを見切りマディーナでイスラームの再出発の道を見出すという意味がそこにはあり、マッカの不信者の親兄弟とも戦うとの決意である。クルアーンでは「アッラーの道の為にヒジュラし、そのあと戦いで殺され、また死んだ者には、アッラーは必ず善美な糧を与えるであろう。」(22章58節)と表現され、マディーナの町へとは表されていない。ヒジュラは、理想とするイスラーム共同体の構築の契機となったのである。ゆえにヒジュラはイスラーム史上最重要事として扱われている。後に第2代カリフ・ウマルはヒジュラを記念してその年をイスラーム暦(ヒジュラ暦)の元年とした。

史実として、ムハンマドがマディーナの郊外クバーに到着したのは当時のアラビアの暦で第三月ラビーウル・アッワルの8日(西暦622年9月22日)である。その年の第1月(ムハラム月)1日、つまり西暦622年7月16日が、ヒジュラ暦紀元元年1月1日に当たる。当時のアラビアは一年間の暦を持っていたが、年代については、例えば「象の年」のように重大事件をその年の名前にして、その前後何年といっていた。ヒジュラ暦は完全な太陰暦で、日没から一日が始まり、日没を零時とする。太陰暦は太陽暦より、一年間が約11日短くなる。それでイスラーム以前では3年に一度の割合で閏月を設け調整した。ヒジュラ暦ではクルアーンに「本当にアッラーの御許で、(一年の)月数は12ヵ月である。アッラーが天と地を創造された日(以来の)、彼の書巻の中の定めである。」(第9章36節)とあるように一年は12ヵ月と定められ、季節と各月がずれていく。また、月が地球を一周するのは約29・1/2日だから、一ヵ月は新月から次の新月までで、29日か30日となる。したがって、同じラマダーン月でも、年によって29日か30日になる。また毎月29日と30日が交互になるとは限らない。イスラーム法の規定によれば、一ヶ月の開始は、実際の新月を目視して決定しなければならない。そこで、曇りにて目視できなくても、それは新月を確認できなかったことになる。しかし、一ヶ月は30日か29日と定めてあるので、たとえ目視できなくても、30日を越えたときには、次の新しい月となる。つまり、天文学的な統計だけでカレンダーを決めることができないことになる。ゆえに、イスラーム世界で出されているヒジュラ暦カレンダーはあくまでも蓋然性を現したものと見える。

ヒジュラ暦の月の名称は次の通りである。第1月ムハラム、第2月サファル、第3月ラビーウル・アッワル、第4月ラビーウツ・サーニ、第5月ジュマダール・ウラー、第6月ジュマダツ・サーニ

ー、第7月ラジャブ、第8月シャアバーン、第9月ラマダーン、第10月シャワール、第11月ズル・カアダ、第12月ズル・ヒッジャ

ヒジュラ暦における陰暦の利点は以下のような事があげられている。例えば、ラマダーン月の断食の時期が陽の長い暑い夏ばかりではなく、陽の短い冬にも行なわれることになり、その苦痛はやわらぐ。また、ズル・ヒッジャ月の巡礼の時期が一定していたならば、毎年その時期が忙しい人々にとって巡礼の機会を失うことになるが、時期が毎年ずれることにより、誰にでも巡礼の機会是与えられることになる。

今年(1428年)のイスラーム年間行事

1. アーシューラー(1月10日—西暦2007年1月29日)
2. 預言者ムハンマド誕生日(3月12日—西暦3月31日)
3. イスラーム・ミウラージュ(夜の旅と昇天)(7月26日—西暦8月10日)
4. ラマダーン(9月1日—西暦9月13日)開始
5. イードル・フィトル(断食明けの祭り)(10月1日—西暦10月13日)
6. イードル・アドハー(犠牲祭)(12月10日—西暦12月21日)

【平成19年度第1回タフスィール研究会開催】

今年度第1回目のタフスィール(クルアーン解釈)研究会が、5月26日2時より文京キャンパスF館で開かれた。今年度はクルアーン第3章を6回に分けて読んでいく。今回は当研究所所長の森伸生が1節から30節までを読み解説した。参加者はめったには聞けないアラビア語の解釈書を使ったイスラームの啓典の説明に興味深く耳を傾けていた。

محتويات العدد

1. افتتاح معهد دراسات الشريعة
مدير معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
2. مدخل الحديث (6) أسلوب تواتر الحديث
طالب دكتوراه بجامعة ملابا أكاديمية الدراسات الإسلامية : هيروفومي أوكي
3. الندوة العالمية الثانية - خريجي جامعة الأزهر
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : هيدويومي موتو
4. مشاركة باجتماع المجلس الاعلى للشئون الإسلامية
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : كيمياكي توكوماسو
5. مقال: مشاركتي الاولى بمؤتمر اسلامي
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : كاسوكي ايموري
6. كلية الشريعة بجامعة بركة الاردنية
طالب جامعة بركة الاردنية : ياسيهيرو موروتاتسو
7. العطور والكولونيا التي تحتوي على الكحول
مدير معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
8. كلمة النشرة: التقويم الاسلامي
اعلان: افتتاح دورة دراسات التفسير (1)